
赤い小人

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い小人

【NZコード】

N4217F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

ある日、突如として現れたのは赤い服を着た、小さな小さな男の子。身の丈は指くらいの大きさで、それが小人だと誰が見てもわかる。彼はゆうと願いごとを三つするように言つが……。

赤い小人（1）

丸い顔につぶらな瞳。

長めの耳に全身一色の服を纏っている。

被つている煙突帽子は、服と同じ色で先がへによりと曲がっている。

る。

また、二頭身か三頭身の体で動き回る彼等。

背の丈は人の指の長さに満つるか満たないか。

人の前に現れるのは極わずか。彼等を人は小人と呼ぶ。

また、全身の服の色は彼等の仮の名を表している。赤なら『あか』、白なら『しろ』である。

本当の名前は彼等自身しか知らない。知つてはいけない。彼等ともう一度と会えなくなりたくないなれば……。

まっさか、こんななんがいるなんて思つてなかつた。
ひょこんと俺の部屋に置いてある机の上にいるのは小さな赤い物体。

始め、それを俺は虫かと思つた。だつて動いてるしつ、小さいしつ。

だけど、先がへによりと曲がった帽子から覗くその顔は、人に近い。

俺のメルヘン知識に寄ればこんな形してるのは小人か妖精。けど、羽根はないから小人に決定か？

どちらにしろ、俺の頭がおかしくなつてるのは確かことなわけで。

寝るかな。マジで。

「あかー！」

踵を返して寝室へ向かおうとした矢先、声がした。聞きなれない声。

振り返ると、ピンク色の物体が俺の視界に加わった。

「仕事は終わったのか？ もも」

ピンク色に抱きつかれた赤いのが言った。よつて見えた。
そうか、幻影だけでなく幻聴まで……。

「俺は今、自分がわけわかんねえ」

俺は独り言をぽつり。

バツと田の前の奴らが俺を見た。視線が交差する。
びっくりして思わず一歩後ろへ下がった。
未だに視線が外れない。

「……見えて……る？」

赤いのが目を見開いてポソリと呟いた。

俺は眉を潜めた。

見えてます。見えてますともっ！

「……おい、あんた。もしかして、さんば ゆうじ。って言つんじ
やないのか？」

「はつ？ 何でお前が俺の名前知つてんだよーーー？」

驚ろきのあまり思わず聞き返してしまった。

確かに俺の名前は山波 勇徒だが。

なんでこいつが知ってるんだ？ 俺はこんな奴に会つたことはない。

「やつぱり……はあ」

なんでか赤いのはため息をつく。

それを見ると怒りが込み上げてきた。知らない生意気なちびや、非現実の最中に置かれた俺の方がため息をつきたいつづーのつ！

「えー？ ジャあ、やつぱり見えてるのね！？」

ピンク色の方が叫ぶ。

もう見なかつたことにする。つて方法は諦めて、俺は返事をした。

「見えてるよ。見えてる」

こうなつたら現実を突き詰めてやるー 俺の頭がおかしいのか、それともコイツらが本当に存在しているのかをつ。

「で、お前等何なわけ？ 俺の幻覚。つてわけではなさうだけど」

「僕等は小人。普段、君達には決して見えない存在

「はつ？ 今まさしく見えてるじゃねえか」

赤い小人が一句一句説明する。まるで説明書の箇条書きでも読んでるかのような言葉を。

だが、その言葉には明らかな矛盾がある。見えない存在なのに今はっきりくつきりと、俺に見えてることだ。

「それは、貴方がアカの運命の人だからよ！」

「運命の……ひとお～？」

俺の質問にはピンク色が答えた。じれったそうに足踏みをしながら。しかし、発言は赤いのよりも意味不明。

思わず疑いの眼差しを向けると、頬を膨らませて対抗してくる。

「はは、運命の人なんて大げさだよ。もも。僕等小人には、世界でたつた一人だけ自分を見るができる人間がいる。という話なだけだろ」

「そんなことないわ！一人よ！たつたの一人！これが運命の人でなくて何だって言うのかしら？」

二人の掛け合いを傍観する。

うつとりと頬を上気させ、人事のように眩くピンクいの。

アカいのの説明も分かりにくいが、ピンクいののは説明にすらなつていない。と心底思つた。

とりあえずわかつたことはある。それはアカいのが見える唯一の人間が俺であること。即ち、俺以外にはこいつが見えないってことだ。

後は……。

「じゃあ、ピンクいのは何なんだ？思いつきり見えてるんだけどよ。

一人の人間につき一人の小人なら、俺には赤いのしか見えないは

」

ずだ。なのにピンクいのが見えてるってのは話が噛み合っていない。
もつと簡単にわかりやすく説明してほしいものだ。

「それは、私とアカが恋人同士だからよー!」

ズビシッと人指し指を立てポーズをとる二頭身ちびっこのピンク
……。

そんな宣言しても俺はいつも構わないが、その恋人やらが後
ろで苦い顔してるや、をい。

「もものことはほつといて。実は、僕に関わった小人は見えるよう
になるんだ。」

「ああ、なるほど。思いつきり抱きついてたもんな。」

しみじみと納得。

俺の言葉に赤いのが絶句して、更に顔全体まで紅くしている。ま
さに紅葉のような赤さ。全體が服含め真っ赤だ。

ピンクは横でいやん。などと言いながら恥ずかしがつているが、
赤いの程ではない。

口をパクパクと動かすが、声が出ていない赤いのを見た方が楽し
いと言つもんだ。

「……そ、そんなことよつ。むつと。あんたにお願いがある。」

とつねに口ホンと咳払い一つし、自分に戻る赤いの。俺を呼び捨
てにして、更に話をすらす。

まあ、いいか。そこまで人をおけよぐる趣味はない。あつさりと
話に乗つてやるか。

「願い事？」

「僕に願い事を3つして欲しい。」

案外にお約束なもんだ。願い事を3つだなんて。しかし、なんでまたそんなことを……。

俺の顔が物語つたらしく、ももが口を開いた。

「何故かつて？ 3つ願い事を叶えたら、願い事を言つた人に一回だけ魔法を使つても良いことになつてるの。普通は人に使つちゃいけないんだけど。」

「ふーん。その魔法とやらを使ってどうする気だ？」

俺の問いにアカの目付きがガラリと変わる。小刻に瞳が動き、動搖が見てとれた。

いつまでも口を開けようとしないアカに代わり、ピンクが説明する。

「そんなの簡単な話よ。貴方の記憶を消すの。私達と出合つた記憶をね！」

「ふーん。」

少し驚きはしたが、利害が一致したことがわかった。

俺だってこんな奴らなんぞ見なかつたことにしたい。奴らにしても、俺に見られなかつたことにしたいらしい。

「ふーん。つて何も思わないのか！？自分に魔法を使われるんだぞ！」

アカがびっくりしたように口を開け、叫びに近い声をあげる。

「別に。忘れさせてくれるなら願つたりだ。その条件、飲んでやる
よ。」

肩を一たんすくめ、眉を上げて見せる。『うひー』となじ。と示すために。
アカは『やうか。』と呟いて俺から顔を反らした。何を思っている
ことか。

赤い小人（2）

俺達は自己紹介を終え、願い事を何にするか相談することにした。

「ゆうと。僕のことは“あか”彼女のことは“もも”と呼んでくれ。そ、願い事を早く」

すぐに急かすあか。

ちなみに、あかとももは単に担当する場所が同じだけらしい。先ほどあかが必死に弁解していた。他にも黄や緑がいるとかなんとか。別に興味ないんで流して聞いてたが。

「待つてよ、あか。願い事の定義を説明しなきゃ、ゆうとさんも考えられないわよ」

ももが焦つて手をパタパタと振りながら、頬を膨らませた。女、子供がここにいたら可愛いとも叫んでいたことだらう。

しかも、あかと違つてちゃんと敬称をつけていた。まあ、爆弾発言が目立ちはするが……。

「定義つてことは何でも叶えられるわけじゃねえ。つてことだな？」

「そりゃあ、そうだよ。何でも叶えられる程、僕達は力を持つてないんだから」

俺の問いにあかはむすつとしたまま答えた。

態度悪いな、こいつ。

「そんな説明じゃ、わかるものもわかんねえだろ」

片手であかを掴み、自分の目線まで持ち上げる。
俺とあかの視線が交差した。しばらく睨みあつているとあかが突如へなりと萎れる。

「お、おい？」

慌てて声をかけた。

いつたいどうじたつて言うんだ？さつきから、こいつの行動は意味不明だ。

もしかして、強く握り過ぎたか？

そう思うと、いつまでも握って持ち上げているのは可哀想だと感じ、ゆきへじとあかを降ろしてやる。

「いあん。ハツ当たりしてた。」「

降ろされてもへによじと頭を下げたまま、か細い声であかはボツリと叫ぶ。それは、妙に弱々しかった。

ハツ当たりと言われて腹が立つたが、かなりへこたれてるあかを見るとい、どうにも怒る気にはなれなかつた。

「あか……」

ももがあかに駆け寄る。眉を潜めて心配そうに彼を見ている。心

中察するわ。とでも言
うような顔。

どうやらももはハツ当たりの原因に心当たりがあるようだ。

「ハツ当たりって……何で？」

「それは……」

あかが口^レじもる。

俺は思わず溜め息をついた。
聞かなきや答えないだろうとは思つたが、聞いても答えてくれそ
うにないようだ。
ももと田^ミが合づ。

「他の仲間が死んだから」

ももの言葉にあかがびくくりと身を震わせた。

俺も流石に一步退く。

ももの目は真剣だったし、あかの反応が嘘でないことを物語つてい
る。

俺達が黙っているのを目で確認し、ももは言葉を続けた。

「見える人が殺したの。その子の運命の人も貴方みたいに、魔法を
へとも思わない。魔法
をただの便利な道具と思って」

「やめろー ももー！」

ももの話を妨げたのはあかの怒鳴り声だった。

ももが田を見開いてあかを見、顔を落とした。

「ゆうと。願い事は、物だけだ。物を出したり無くしたりするだけ。量もそこまで大量の物は駄目だ。それと、僕のことは絶対『あか』と呼んでくれ。」

わづ念を押してあかはももを掴んで机から飛び下りた。

「お、おい？」

「用がある時は名前を呼んでくれ。どうせ、そんなすぐには願い事は決まらないだろ。」

机の陰から聞こえる声。見えないことが、小人の存在を否定していく。

夢なんじやないか。そう思えてきた。

するりと視界に戻ってきたのはピンク色。

俺はしゃがんで、彼女の様子が見える所まで近付いた。

「ゆうとさん、『めんなさい』。あかは普段とっても優しいんです。あんな風に怒るのも仲間を思つてのことだ……」

「わかつてゐる」

必死に弁解するももに、何故かそんな言葉が口をついて出た。
よくわからないが、なんとなくあいつの気持ちはわかる気がする。
本当にわかっている
かと聞かれたら答えられないが。

「 わう…… ですよね。 ゆうとさん、 ですものね! 」

ももはこつこつと笑って頷いた。 上げた顔は、 何か納得している
らしく、 すっかりとし
ている。

「 ゆうとさん。 魔法の定義をお教えしますね。 」

「 あ、 ああ。 」

願い事か…… 僕の記憶を無くせ。 って言えば全て済みそうな気が
するんだけどな。

「 まず、 私達小人は人間への小さなお手伝い。 それをすることが仕
事です。 」

「 ああ、 いつの間にか縫い物ができてたり、 ケーキが出てきたり。
とかだろ? 」

昔のお話を思い出しながら言つた。 昔だったら、 こんな小人に
命ねば大はしゃぎした
だろうに。

今の俺はそう容易く信じることも、 喜ぶこともできやしない。
なんだか胸を掴まれたような切ない気持ちになってしまった。

「 はい、 やつたかな? と思つて小人がいるなんて気付かない程度
のことです。 それが私
達ができる範囲なんです」

ももの声は落ち着いていて優しい。 それにつられて俺の胸の痛み

が薄れて行く。

「思つたんだけどさ、人の記憶を忘れさすこともできるんだろ?」

気持ちが幾分軽くなつたせいか、頭の回転もよくなつた。
あかとの約束を思い出したんだ。『三つ願い事を叶えたら、記憶
を消させて欲しい』そ
れなら、記憶操作はできるはずだ。
ももは頭を下げて、首を横に振つた。そして、振りながら俺を見
上げて、また顔を落と
す。

「禁止されてる魔法なの。命の危険に晒された時だけ使っていい禁
断の魔法。だから、願
い事として使うことはできないんです。」

「……ちょっと待てよ。じゃあ、俺に見付かったことはあかにとつ
て、命の危険に晒され
るってことか?」

別に俺はあかに害をなすことはないぞ。と続ける前に、ももが口
を開いた。

「言つたでしょ?仲間が死んだつて。運命の人に殺されたつて。」

ひどく冷たい印象を受けた。伏せめがちな目と、その視線が。
事実、ももだってあか動搖にショックを受けてるだらうじ、怒つ
てもいるのだらう。

それが表に出たとすれば納得が行く。

「……やつこいつを見たよ。」

「「」「」めとなさこー。」

慌てて冷たい表情から元の表情に戻るもむ。更に手を口に当てる、耳を赤くしながら俺の様子を伺っている。

「いや、ここんだけじか。……答えたくないなら答へなくていいんだけどよ。その死んだ小人つてーのは、ビリヤつて死んだんだよ?」

「むう」と小さつて、本当あかに似てる……

ぐすりと笑つもむに、思わず『ビロジがだ。』と突つ込んでしまつ。あかと俺が似てる? 何を馬鹿なことを。ふふ……死んだのは、とあることを知られたからです。私達はそれを知られたら死んでしまうの。」

「とある」と?..

ビリヤが遠くを見るももの目から涙が一つ。それをすぐに拭つと俺にウイーンク一つ飛ばして

「それを言つたら、気になつて調べたくなるでしょ? じゃあ、ゆうとさん。何かあったら呼んでくださいね!」

元気良く暗闇へと消えていった。

いや、十分に気になるんだがな。をい。

……仕方ない。とりあえずは一つ田の願い事でも考えるかな。

赤い小人（3）

あの夢から一ヶ月。

何事もなく過ぎていく日常。いやあ、素晴らしい。

「いい加減、願い事をしろーっ！」

カーンという音と俺の頭への衝撃。視界が壁から床へと変化する。ころころと床を転がってきたのは、小さな空き缶。それが頭の後頭部に当たったのは言うまでもない。

つか、真面目に痛い。じんじんと痛む頭を押さえながら声の主をにらみつける。

「あんた、この一ヶ月何度言つたら願い事すんだよーー!? 現実逃避してんじゃねえよーー!」

きやんきやんと子犬の「」とく吠えるちつこい赤い奴。

弱い犬ほどよく吠える。じゃなくて、問題は俺の頭が何故痛いのか……。

「てめえ。人様に缶を投げるんじゃねえーー!」

「うわ！ 痛いっつーの、このアホーー！」

煩いそれを片手で掴みあげて握りしめる。するとそれは案の定、更にわめいて手をぱたつかせた。

「つふふ。日常つて素晴らしいわ

『これをお口常に入れるなーー。』

先ほどまであかがいた横のところももは腰かけて、ひつとつとした目でじゅりらを見ていた。

ももの発言にあかと俺の声がハモつた。嫌そうな顔のあかと田^たがひづ。まあ、俺も同じような顔してるだひうけどな。

「そんなこと言つて。最近すうとそれの繰り返しじゃないよ

『ひづ』

ももの言葉が心臓をぐさりとえぐる。そんでもひづまたもやあかと台詞が被り、またも視線を見合わせてしまひ。わかつてゐる。この繰り返しだつてじとづらつ。

「むづどがどつと願い事をすればいいのかー。」

掴んでる手の力が抜けてたせいか、元気良く吠えているあかをぎゅつと握り、溜め息をついた。

「はあ、かとづくな。このご世代、ありとあらゆるものがあるんだよ。別に今、何か欲しい物なんかないんだつてば」

ちなみによく願い事で話して出て来る富士や名古屋、地位なんかは既に却下され済みである。

『寒い時期だしマフラーなどひづへ。』

俺の腕の中でぐつたりしていのあかに代わって、ももが提案する。

「あのな、そんな毎年使つもん。腐るほどあるつーの」

本当にもつ、「こつらの叶えられた願い事つつつたら、普通どこの家庭にでもあるものばかり……。

「じゃあ、ヤーター」

「ある」

言いかけたももの言葉を遮る。

「あ、そつだ！アレなんてぞつだ？」

二つの間にか復活したあがが手をポンと叩く。
どうやら何かを思い付いたらしく。

「なになに？」

ももが促しの言葉をかける。
視線があかへと注がれた。

あかは自信満々と言つたように笑みを溢げ

「サンタへプレゼント頼むための靴トー」

ベシッ！

思わず俺は手に持つていたそれを床に向かつて放り投げた。いや、
投げ捨てた。

あっけなく床に衝突して伸びてる馬鹿。

「あーあ、あか真剣なのに。」

「なお悪いー サンタなんて信じる年じゃないつーのー。」

激しく怒鳴ると、ももは肩をすくめ崩れつ面を俺に向けてきた。

「サンタは本当にいるのよ？ それに、小人の出した靴下には絶対にプレゼントを入れてくれるんだから。」

まあ、小人もいるくらいですから、百歩譲ってサンタもいることにしよう。

だがつ

「プレゼントなんて子供騙しの玩具か菓子だろ」

「うつ……ゆうとさん、夢がないなあ。そりや、お菓子だけじ、とつても美味しいこのよ？」

「夢がなくて結構。俺はシビアに生きる。」

そんな。とももが文句を垂れるが知ったことではない。
まあ、彼女等にしてみれば夢の住人の小人なわけで、夢を否定されるのは嫌だろうが。

「とつても美味しいチョコレートなのに……あ、そうだ！ ゆうとさん、お菓子好き？」

ぶつぶつと文句を垂れてたかと思うと、今度は目を輝かせているのも。こいつ、百面相できるんじゃないだろうか……。

「菓子？……嫌いじゃないが」

「やつた！あのね、あのね、あかが作るハチミツクッキーがすっ
ごく美味しいの！」

更に輝いた目で身を乗り出し、俺に視線を送る彼女の思考は手に
とるようになる。

だからと書いてそのままやすやすと欲求を飲む俺ではない。

「で、食いたいってか？」

「うん！食べたい！－！」

欲求を飲む俺ではない。はずだが、いかんせんももには何故か弱
い。

まあ、笑顔で女の子に懇願されれば普通はな。小さい小人だけど
さ。だけど、小人の中ではそこそこの美人だとあかが言ってたし。
よしとするか。

内心、意味の分からぬ屁理屈を立てながら、仕方なくしゃがん
であかを見る。

あかは、まだ床に突っ伏したまま……。

「おい、あか。起きる。一つの願いが決まったぞ」

「ふん。ももになんか鼻の下伸ばしてさ。それでお願い」とが決ま
った？ テレテレしきじょんか

顔を上げて話出したかと思いきや、こいつつ。

相当俺と喧嘩したいらしい。悪いが、売られた喧嘩は買つぞ！？

「あかつたら、焼きもちやいて可愛いーー！」

勢い勇んで腕捲りをしていたのだが、黄色い声に体勢を崩す。もちろん両の主はももに他ならない。だが、それはあかには逆効果だり……。

「自信過剰もいい加減にしろよ！」

ほり、カツと赤くなつて怒鳴る。

しかし、あかは一瞬にして身を震わせたじろいだ。
ももの目がうるんだのだ。やはりあかも、ももには弱い。
いついつのを見ると、確に俺とあかは似た者同士かもしない。
と思われるな。嫌だけど。

「ね、願い事を叶えないとは言つてないだろつ。」

早口でまくしたてるあかの姿を見ると、思うことがある。
俺の前でいちゃついてんじゃねえ。

俺の内心を知つてかしらすか。いや、知らないであらつまま茶番劇は続く。

「でも、あか嫌そうな顔してた……」

ついに彼女の目から涙が溢れでる。びくつと身を震わせたのはあかだけではない。俺もだ。

「え、いや。その……」

慌てて弁解できないあか。んなもんだから、ももが顔を落とす。

仕方ないな。まったく。

赤い小人（4）

「うわっ！？」

「きやつー。」

思わず行動に悲鳴をあげたあかともも。まあ、いきなり捕まれて肩に乗つけられてるんだから当たり前か。

一人はきょとんとした目で俺を見つめた。わけがわからない。そつ言つてるようだ。

「クッキー作るんだろう？」

口の端をあげてやると、ももの目が涙田とは違った輝きをともす。そして、元気良く頷いた。

「うんー。」

「……ふう

ももの機嫌が直ったことに、安堵の溜め息をつくあかだった。それを見ると、どうも笑いが込み上げて来てしかたがない。

とりあえずはキッチンに移動。そんな広いキッチンではないが、まあ俺と小人が動く分には十分だ。

「って、本当に作るんじゃなくて魔法でぱっと出す。のか？」

そういう魔法使えるわけだから、よく考えればそうだよな。

あかが俺の台詞に目をキラリと光らせた。

「魔法より、作つた方が美味しいよ。だいたい小人は魔法より作る方が得意なんだ」

胸を張つて言い放つ様は自信満々。これは多少期待してもいいかもしだれない。

あかは、軽々と俺の肩から飛び降りるとキッチンの上へと着地した。

「さーて、小麦粉、卵にバター。んでもつて少量の牛乳！」

歌うかのように陽気に材料の名前を出し、指を指して行く。するとどうだろう、何もなかつた場所に、次々と言つた材料が出てきたじやないか。

袋ごと出てきた小麦粉を筆頭に、ボールの中に入つた数個の卵、皿に置いてあるバターに、カップに入った牛乳。更に、菓子作りに欠かせない泡立て器や皿も出てきた。

「さーて、作るぞー。もも、運ぶの手伝つて

「うん！」

腕巻りをし、舌で唇を濡らす様は楽しそう。そんなあかが、勢よく小麦粉に手をかけた。

反対側にはももがスタンバイ。

ズシャ

勢い良く持ち上げたかと思つたら、小麦粉があつさり崩れる。袋の中からドサドサと白い粉が飛び出でてきた。

それと、「アチ。そんな潰れるような音もおそらく出ただろう。

『セーの』という掛け声と共に、あかは袋の影に。いうなれば下敷になつたのだ。

重かつたのか、反対側にいたももの力が強かつたのか、はたまた転んだのか。理由はわからないが、間抜けな光景だ。
しばらくどうなるかと様子を伺つてみる。しかし、ももが慌てるだけで他は何も変わらない。

ももが、なんとか袋を持ち上げようと試みる。しかし、粉が出るだけで袋を動かせそうにない。諦めたのか、しまいにはおろおろしながら俺を見上げる始末。

「はあ」

ため息一つ。片手で倒れている袋を持ち上げて立たす。その際今までより多くの粉が溢れたが気にしない。例えそれで、あかが赤と呼べない白い色になつたとしても、気にしない。

あかは案の定、蛙のごとく倒れていた。しかし、直ぐ様起き上がり身を震わせた。

「魔法でも使つて運べばいいだろ？」

あかが礼の言葉をいいながら服を叩いているのを横田で見、文句を突き付けた。

その言葉にあかは困つたように苦笑い。

「小人は魔法が苦手。更に言つなら、自分の得意とする魔法以外はからつきし駄目なんだ」

「あかは物を出す魔法しか使えないの。重い物を運ぶのはきーの役目なの。きーっていうのは黄色の色の小人よ」

あかともものは説明しながら小麦粉を見上げた。運ぶ方法を考えているよつだ。

「なら、その黄色に頼めば?」

「駄目。本来の仕事の方に皆行つてゐるから。あか、ボールを側に持つてきて、袋を倒してみようよ」

質問にあつさつと否定の意を示すのはもも。あかはももに言われた通り卵が入つたボールをえつちりおつちら押している。

……亀の歩みの」とき鈍や。」れじやあ、いつまでかかるかわかつたもんじやない。

仕方なしに小麦粉を片手に持ち、もう一方の手でボールを近くまで寄せた。

「なんだよ、ゆうと」

押すものが突如なくなり、すつゝろんだあかが、顔を押さえながら不思議そうに問いかけてくる。

「手伝つてやるから指示よ!」しな

「……あ、ありがと」

驚きの表情が、あかの顔に貼りついている。

わからんでもない。俺だつて正直な話、内心驚いている。生意氣で非現実的、できれば関わりたくないと思つてた連中に、あつさりと手を貸している今の状況に。

別に仲良くしようなんて今でさえ思っていないわけ……ただ、手を貸すくらいなら良いかと思つただけで。いや、こいつらに任せてたら日が暮れると思つたから手伝うんだ。ああ、絶対にそうだ。悩んだすえ、答えを出している俺を知るよしもなく、あかは作り方を指示していく。

できたのは丁度三時のおやつの時間。

昼前から作り出し、できた数はかなり多い。大皿に溢れんばかりに収納されている。しかもそれが一つ、二つ、三つ、四つ……。短時間でこんなにたくさん出来上がったのは、焼く時間がほとんどからなかつたせいだ。それはなぜか。ももが言うには時間を短縮できる魔法を持つた仲間が助けに来たらしい。

あいにく、あかは作るのに一生懸命で、その仲間と話たりしなかつた。だから、俺にはその仲間が見えなかつたわけで。

クッキーが、すぐに焼き上がるのが見えただけ……。ちょっと氣味が悪かつたが、小人が普段は見えないということがよくわかつた。ちなみに、今も透明人間がごとく、その小人が食べているクッキーが何もない空間に消えていっているように見える。

「ああ、ゆうとは僕の見える人なんだ」

あかが何かに答えを返す。すると、今まで見えなかつた小人が姿を表した。

黒色で帽子を深く被つており、目が見えない。

「へえ。じゃあ、これがあかの……」

皿を出すことなく俺を見上げる黒いの。見えてるんだろうか……。

「んー！ 美味しいー！」

「うん。まあまあの合格点だ」

ぱくぱくと、次から次へ頬張っていたももの声があがつた。
それにつられてあかかも感想を述べる。可愛くない物言いで。

「あのな、お前に言われた通りやつただろ?」

「多分、力加減の頃合いのせい。」

俺があかの口にクッキーを多量に押し込むのを無視し、黒いのが
ぱつり。

「もがむー。」

黒いのの言葉に気を取られたら、あかが俺の口の中にクッキーを
敷き詰める。魔法だろうな。誰かに目配せしたのが見えた。
出来立ては熱い。マジで。もちろん俺はむかついたので、あかを
クッキーの山に押し込める。

「ふ、あははは。あかとゆひとせん、何やつてるの?ふふ。」

ももは笑って、黒いのはもくもくと食べ、俺とあかは火花を散ら
してファイティング。

賑やかで煩いが、つまらなくはない。気持をぶつけの相手がいる
のは案外……。

まつ、たまにはこんなおやつ時間を過ごすのも悪くはないかもし
れない。なんて、柄にもなく思つたりする。

赤い小人（5）

見事に皿の上の物がなくなり、山になつた腹を上にしながり寝る小人達。

よくあんな小さな体にこんだけのものが入つたな。となかば関心する。

一気に静かになつた場所で、俺は椅子に背を預けて天井を仰いだ。自然に頭の中は考えがあちらこちらに行き交う。

今やつと一つ目の願いごとを叶えたわけだ。まあ、大した願いごとでもないが。寧ろ俺が作つたんだから願いごとが叶えられたとうのはおかしい気もする。けど、どうせ初めから期待などしてないわけで、文句を言つつもりはないけどな。

「残り後二つ……か」

小さな独り言。ちらりとあか達を見たが、彼等が起きる様子はない。

二つ目の願いごと。きっと起きたらすぐに、あかはその話を切り出すにちがいない。一つ目の願いごとの時も何度もさせられたし。

問題は、俺が何も願いごとを考えてないってことだな。だって二つらが叶えられるのってたかが知れてるし。

「魔法は苦手。菓子作りが得意。寧ろ家事全般が得意そ�だが」

今度は視線をずっとあか達に向けてみる。出会つた時から今までの記憶が頭をよぎる。

最初は生意気なガキだったよな。人のこといきなり呼び捨てにするし。

「……そういや、なんでこいつ俺の名前を知つてたんだ？」

ふと、疑問が浮かぶ。一つ疑問が浮かぶと、水に墨を落としたよう^うに、次々と不思議なことが浮かび上がってきた。

なぜあかは俺にしか見えない？

運命の人つてこいつのは実際どうこいつことなんだ？

なんで俺の記憶を消さないといけないんだ？

なぜ、あかやももとこつた名前で呼ばせる？

これ以外で呼ぶな。つてことは、本当の名前じゃない。つてことは
か？

偽名、ハンドルネーム？

どうして俺に見つかったら命の危険にさらされるとだ？

仲間が死んだからか？

じゃあ、どうせひつて仲間は殺されたんだ？

そういうえばそもそもが言つてたな。とあることを知られたら死ぬって。

とあることつてのはいったい何だ？

「……駄目だ。何一つわからんねえ」

頭を左手で粗く搔いた。

駄目だ。疑問は次から次へと出でてくるのに、答えが見付からない。
いや、俺が知らないだけだ。
きっとあかなら全て知っている……。

「気になるな……」

様々な疑問は消そうにも消えずに燃え上がる一方で。
知りたくて仕方がない。何か方法はないのか？

「……そつだ！」

良いことを思い付いた。

これならあかも答えるしかない！

「よし！あかが起きたらさっそくやつてみるか。」「

つきつきとする心を押さえながら、俺はあかが起きるのをじっと待つこととした。

あかが起きたのは約一時間後。
まだ眠いらしく欠伸をしながら俺を見ている。
ちなみに黒いのももは既に起きている。黒いのは仕事があるとかで、どつかへ行つたが。

「起きてすぐに悪いんだが、二つ目の願いをいいか？」

田を擦りながら、あかはこくんと縦に首を振る。

俺は右手を開き、それを前に押し出す。

あかとももが俺の手と顔を交互に見た。

「俺の五つの問い合わせ、イエスかノーで答えて欲しい」

要件だけを述べる。

俺が今からしようとしていることを、知られてはいけない。余計なことなんか話してたらいつ口が滑るかわかったもんじゃない。こいつが願いごとを承諾するまで、怪しまれでは駄目だ。心臓の音がやけに大きく聞こえた。

「そんなことでいいのか？ もつと他に好きな願いごとをすればいいのに」

田を見開いて、不満いっぱいの抗議の声。

「なんこと言わせて、お前等が叶えられるひとつたら、たかがしれてるじやねえか」

「うひ。せりやあやうだけば……」

直ぐ様口をついて出た言葉は、あかにダメージを「えたらしくて。
あかが頭を垂れ、うな
だれでいる。

「あ、いや。菓子とかよつ、お前等のことを知りたいと思つてよ」

しまつた。あんまり深くしじげるもんだから、慌て本音をボロリ。

「僕等の？ 小人のことを知りたいのか！？」

「そ、そうだ。小人について知りたいんだ。答えてくれるか？」

俺はほつとした。深い意味までは悟られなかつたらしい。

だいたい、あかの目が輝きを放つてゐる。怪しまれていな証拠だ。

ただ、嬉しそうな声には、少々良心にトゲが刺さるが。

「それなら、イエスとノーだけじゃなくてもいいのに」

「いや、答え難い」ともあると思つしな。イエスとノーで答えてくれればいい

あかのことだ。喋りたくないことは、決して喋らないだろ？

しかし、イエスかノーの一択だけなら、自分から喋ることはない。

だから、深い部分ま

で踏み入れない可能性が高い。それならば、答える方としては答えを軽く見て、簡単に言

うに違いない。

ただし、俺の今回の作戦はイエス、ノーだけで十分。俺が考へていることが、当たりかはずれかの答えが出ればいい。

「わかったよ。ゆうと。それじゃあ、五つの質問を僕にしてくれ

「オーケー」

よし、あかが承諾をした。これからが勝負だ。

「一つ目の質問だ。お前達は、あかやももの他に本当の召前があるのか？」

「……何でそんなことを聞く？」

あかの顔付きが一気に険しくなる。警戒されてるのがひしひしと伝わってきた。

でもそんなのは予想済み。

「なーに、怖い顔してんだよ？　お前達があかやももって呼べって言つただろ？　他で呼ぶな。つて。だからさ、他に名前があるのかどうか気になつたんだよ。イエス？　ノー？　どっちだ？」

なるべく軽い口調で、ふざけたよつて。探つていてと思わせては駄目だ。

あかは、険しい顔を崩さない。しかし、

「イエスだ」

答えた。あかは俺の勝負にノつてきたのだ。

よし、俺の勝ちだ。これで、もう隠し通す必要もない。バレたところで、あかは最後まで答えるしか道はないのだ。

一つの問いに答えたのはうまい、今後拒むことはできないはずなんだ。何つてたつて、これは願い事。願い事は最後まで叶えなければ、願い事ではない。

「んじゃ、一いつ皿。もしかして、名前はお前達の弱味か？」

「イエス」

俺が真剣になると、あかも声を低くした。真剣差が伝わってくる。心臓の音がいつもより早く聞こえた。

今度の返答は早かったのは、ももが何か言おうとする前にあかが答えたからだ。

先に発言することで、あかはももを制した。口出しする」ことを、決して許さないと。

ももは何かを言おうとして開いた口を仕方なく閉じた。自分は蚊帳の外だと感じたのだろう。黙つたまま俺達を見るだけ。

あかがそんなももの行動を確認し、俺に視線をなげた。それは、早く質問を進めるという合図。

にしても、名前が弱味か……なら教えてくれるわけがないよな。今までのことも納得がいく。

まあいい。気になることは、突き止めればいいことだ。疑問はある。なぜ俺があかの見える人のか。

次の質問は一つの賭けだ。ももが何度も俺とあかが似てるとていたから、たぶんあつているとは思つたが。

「三つ目。俺とお前に何か共通点があるから、見える人、なのか？」

「イエス」

あかが躊躇することなく答える。名前といつ単語がなかつたせいだろう。答えるも支障がないと考えていいんだ。

答えはイエス。といつひとま、俺とあかは何かが同じはず。顔、形、性格は明らかに違う。ということは共通点は俺が知らないあかの部分ということだ。一番確率が高いのは生まれた日。世界で一人だけなのだから、何か特別な共通点のはずだ。

険しい表情は変わっていないあかだが、俺の意図はわからないらしく眉を潜めている。

後質問は一つ。俺は次の質問を口に出した。

「四つ目の質問だ。あか、お前の名前は俺が知ってる名前だろ?」

「う……」

あかは押し黙った。ようやく俺が考えていることがわかつたようだ。

俺の考えていること。それは、あかの本当の名前を知ること。知つたらどうなるのか。

それが気になつて仕方がなかつた。

この質問にあかが答えばその答えも完成する。

「あか、答えるよ」

「……イエスだ」

低い俺の声に、あかが諦めたように顔を落とし、答えた。

答えは予想通りイエス。

俺が知っている、つまり俺に関わりがあるものの名前。親、兄弟、
親戚。

俺に兄弟はない。と、すると親や親戚。

親や親戚だとしたら、俺に名前がばれる可能性はかなり低くなる。
なにせ、予想しなけ
ればならない幅がとても広くなるのだから。

それに、親や親戚の名前を知らない人だって、世の中にはいる。
また、俺はあかやもも
に親や親戚の話はしていない。だから、俺が親や親戚の名前を知つ
ているかどうかはわか
らないはずだ。

だが、彼等は俺が絶対に名前をわかるだろうと予測している。何
度も“名前を言うな”

という警告が確固たる証しだ。
他の誰がわからなくても、俺が絶対に知っている名前。
それは……。

赤い小人（6）

「最後の質問だ」

「……わかってる。答えるわ」

確認するように告げると、あかが頷いて俺を見る。
彼は覚悟を決めていて、もう険しい顔をしていない。感情が読み取れない顔で、真っ直ぐ俺を見つめている。

心臓が今までより早く、早く鳴り響く。音も大きくて。
これから、あかの名前を口にするんだ。と思うと、口元が緩む。

合ってたら良いと思つ。

本当の名前を呼べたら、近くなるような気がするから。

「あか」

一言づつ区切つて言葉をつむぐ。

口から出る言葉を自覚しながらも、なぜか俺は他人が言つている
ような妙な感覚に捕わ
れていた。

「お前の、名前は、」

口が動く。

お前の名前は、俺と同じ……

同じ名前の

「山波ゆう

「ダメーーーっ……」

とだな？」

ももの勘高い叫び声に、俺の言葉の詰尾は搔き逆された。
何かと思い、直ぐ様ももに視線が行く。

ぎょっとする。

小刻に震え、口を押さえ、カタンと膝を付くもも。目からほほう
ぼろと涙が溢れ出していた。

何をそんなに怖がっているんだ？

疑問に思つてよく見ると、ももは一点を凝視していた。

彼女の視線を追う。

ももの視線の先には、あかがいた。

ただ、あかの向こうの景色が、うつすりとあかを通して見えた。
彼の体が透き通っている

るのだ。

「……イエスだよ。僕の名前はあなたと同じ、山波勇徒」

俺と目が合ひ、あかは一瞬寂しそうな目をし、最後の質問に答えた。

だが、すぐに口の端を上げ、言葉をつむぐ。

「勝ったと思った？ 残念だけど、少し考えが足りなかつたね。ゆう

と

「……」

俺は何も言えなかつた。
あかの馬鹿にしたよつた言葉と嘲笑。だけど、それに腹が立つとかはなくて。
何を言つていいのか、何が起つていいのか、頭の中が真つ白だつた。

何も考へられない。

ただ、あかが透けているのがひびく嫌悪感を搔き立てる。胸がぎゅつと締め付けられた。

「どうせ、弱点の名前を知つて、僕を齎すつもりだつたんだろ？」「ど。そうはいかない」

あかの視線は冷たかつた。その視線と、皮肉たっぷりの口調が、俺を軽蔑している。

齎すという言葉に慌てて違うと口を開きかけたが、次のあかの発言に俺の声は出していくのをやめてしまった。

「名前は確かに弱点だ。なんてたつて、名前を呼ばれてしまえば僕達は消えてしまつからね。」

仲間が殺されたの。運命の人。
前にももが言つていた言葉が頭にこだまする。
名前を呼ばれたら消えてしまつ。

仲間は殺された。

あかは消える。

「……死ぬつてことか？」

やつと出たのはあかへの問掛け。彼は俺に頷いてみせた。

「ちょ、ちょっと待てよー！冗談だろ？たかが名前を呼ばれたぐらいで死ぬなんてよ。そんな笑えない冗談つ」

上擦つた声が出た。無意識に口調が早くなる。

胸の奥で何かがつつかえて痛い。胃には何か重い物が沈む。そんなの冗談に決まってる。俺が名前を知ろうとしたから、あかももがふざけて俺を

はめようとしてるんだ。そうに違いないつ。

お願いだから、そうであつてくれ！

けれど、そんな期待はすぐ打ち砕かれた。ももの言葉で。

「嘘なんかじやないつ。あかは、あかは消えてしまつ！私達小人は、名前を誰にも知られてはいけない！神様との約束よーー！」

ももは大声で叫んだ後、泣き出した。それはあまりにも痛々しい泣き声。喉が枯れるよ

うな叫び声に、大粒の涙。それが止まることを知らぬかのよつて続
いて。

悲しい。

そんな気持ちを訴えてくる。自分の気持ちが、ももの悲しみに引
きずり込まれる気がし
た。

喉に鉛が入ったかのような感覚。出た声は、かすれた。

「……そんな……そんなこと。ってつー

その後が続かない。

俺はあかに何て言おうとしてるんだ？

あかはそんな俺を見ながら、笑つた。眉を潜めたまま口が笑う。

「悔しそうだな。まあ、僕にしちゃあいい気味。って感じだけど」

肩をすくめるあか。いい気味つて……自分が消えるのに?
どうして、そんなことを言つんだ?

弱点を知つて、脅すつもりだったんだるつけど。

あの台詞が記憶を通して、もつ一度俺の胸に突き刺さつた。

「違う……違うんだつ。名前を知りたかったのは、お前の……お前

の本当の名前を知りた
かつただけで！

言葉を放つと、堰を切つたよつて口は止まらなくなる。
だって、俺は本当の名前を知りたかつただけなんだ。
「本当の名前を知れたら、仲良くなれるんじやないかって。親しく
なれるんじやないかっ
てつ！」

無意識に声が大きくなる。
深く考えてなかつたんだ。

本当に、名前を言つたぐらいで「こんなことになるなんて。
」になることになるなんて、思わなかつたんだつ！

「 ゆひと……」

あかが俺を呼ぶ。その声はノイズがかかつたよつて聞かべりくな
つていた。
胸が壊れそうだ。痛くて。痛すぎて。
あかがだんだんと消えて行くのがわかる。

俺のせいだ。

そう思つた。

俺があかの名前を呼ばなければつ……

「「めん……」

最後に出たのせやの言葉で。あかはやつと聞こえる声で一瞬

「いいんだ。やつと名前を呼ばれた時、本当は嬉しかったよ。僕が僕だと感じることができて。ありがとう」

そう言つて消えていった。
何も残さずに。

消えた。

そんな礼なんて言つなよ……消えちまつのは。死んじまつのは！

赤い小人（7）

しばらくあかが居た場所を凝視していたが、見ていくつちに胸の痛みは更に増して。

思わずやりきれなくなり、突っ伏した。両手で頭を隠し、動くのをやめた。

何も考えたくないのに。

どうして？

その言葉が頭に敷き詰められていく。

苦いものが口の中に広がって、熱いものが一筋、頬を伝つ。

「ゆうとわん……」

涙が止まつていないのでう。涙声でももが俺の名前を読んだ。俺は顔があげられなかつた。

ももだつて俺に何度も忠告してくれていたのに。そう想つと、どんな面を彼女に向ければいいのか……。

「ごめん……俺の、せいだつ……」

まだ喉につつかえる物がある。拳をぎゅっと強く握つた。

俺が名前さえ呼ばなければ。

もやもやとした胸の内は苦しこと悲鳴を上げる。手の痛みでその苦しみが消せたらいい

の。」

痛いくらいに強く握った拳に、小さな暖かい感触。ももの手が触れたのだと、思った。

「違うよ、ゆうとさん。私達がちゃんと話しておるべきだったの。ゆうとさんなら、わかつてくれたのに。言わなかつた私達がいけないの」

だんだんとか細くなつて行くももの声。

「いや、俺が名前なんて呼ばなければ……知りうとしなければいい。」

俺やももがそんなこと言つたって、あかが戻つてくるわけじゃない。

そんな言葉が頭をよぎると、より胸が張り裂けそうに痛む。

「……ゆうとさん。今まであつたこと、全部忘れてください。」

ももが言つた。その言葉に、俺は思わず顔を上げた。

てつくり泣き顔のももがこゝと思つたのに、彼女の顔は微笑んでいた。

けれど、田は赤らみ、その微笑みはどうかせこひなこ。

「私もあかが消えた今、もうすくゆうとさんには見えなくなります。だから、いっそ全て忘れてください。夢だと思つてください」

ももは俺に言つた。全てを忘れてしまえど。確かに俺は、夢だと信じじめば夢になるだろうし、この辛さから逃げられる。

だけど、ももにとつては……。

躊躇つているとももは更に俺へと追い討ちをかける。

「ゆうとわふ。何を躊躇つているんですか？あかとの約束が少し早まるだけです。全てな

かつたことにする。それを始め、貴方も了承したじゃない。」「

ね？と笑つてみせるもも。俺はももが必死に感情を押し殺しているのがわかった。

本当は叫びたいだらう。泣きじゃくって、俺のせいだと言えたら、お前はどれだけ楽になるだらう。

でもそれをやらないのは、ももが俺に優しいからだ。俺が傷付いてるつて思つて、自分が傷付いてるのに、気を使つて優しくする。

それが激しく俺を空しくさせる。

確かに最初はこんなこと夢でありたいと想つたさ。だけど。だけど、このままももやあかを放つて置くなんて……嫌だ！後味が悪すぎるじやねえ

か！！

どうにかなんねえのか？どうにか……。

そうだ！ちょっと待てよ。まだ、俺は最後の願いをしていない。なら、もしかして……

「をい、もも！あかは消えけまつたが、最後の願い事はまだできるのか？」

「あかの存在は、私がゆうとさんに見えなくなるまで持続します。だから、私が消える前なら、私が責任を持つて叶えます！」

ももは言った。最後の願い事を叶えたいと、俺に。
そして、願い事はどうやらまだ有効らしい。だが、時間がない。
ももがあかのようすに透け始めてきたのだ。

「なら、あかを生き返させてくれ！」

单刀直入にももに願った。一番の願い事はこれでしかない。
俺の願いに、ももは額に皺を寄せた。かと思うと頭を垂れ、首を
横に振った。

できない。

そう彼女は言った。

どうして？

そう質問するまえに彼女は答えた。俺がどこかしらで予想してい
た答えを。

「駄目です。あかを生き返らせるのは、人間への手伝いでも、些細
な願い事でもない。私
達の叶える力では、叶えられない願い事です」

淡々としゃべり、頭をあげるもも。他には?と俺を促す。
叶えられない願い事。

わかつてたさ。小人の願い事では、叶えられない願い事だつて。
でも、それは单刀直入に言つた場合。きっと他に何か方法がある
はずだ！
何か。

待てよ……あかは何で消えたんだっけか？

俺が名前を呼んだせいだ。

なら、それを忘れたらどうだ？

時間はなかつた。もうももの体を通してあちら側が見える。

俺は、早口でまくしたてた。

「もも、俺があかを呼んだことを忘れたらどうだ？そしたら、呼んだこともなしになるんじゃ？」

これなら、どうだ！ と期待に胸を膨らませ、ももをじっと見つめる。

が、ももは、首を横に振ってしまった。

頭に強い衝撃を受ける。これで駄目なら……もう、ももは消えてしまう。

最後の願い事は、叶えられない……？

「駄目。ゆうとさんが忘れても駄目なの。神様と小人の約束を破ったことを、神様は知っているから。」

ももはそれから、さよなら。と言葉を続けた。
直ぐに彼女もまた、俺の前から姿を消していった。
結局、最後の願いは叶えられないます。

これで、夢であったと思いつこと以外、方法はなくなつた。

後味の悪さを残して、彼等は去つて行つたのだった。

俺の前から。

赤い小人（8）

あれから、約一ヶ月。

だんだんと記憶が薄れて、過去の夢であつたと思ひよつになつて
いた。

ただ、心のどこかでまだ忘れたくないと言つてゐる自分がいるの
も確かで。

だから、毎日あかに教わつたクッキーを作る。今日も皿に盛り付
け、椅子に腰を下ろし
た。

窓から見える青い空をぼーっとしながら眺めながらあの日をかえ
りみる。

あの後、ももがいなくなつて一人になつた俺は、自然に涙が溢れ
でて……止まらなかつ
たつて。今思うと恥ずかしいが。

でも、泣いた後はすつきりして頭もよく動いたつて。今更最後の
願い事なんて考えて
な。と思いつつ思つたことを口にしてた。

『神様との約束なら、神様とやらの記憶をなくせば……』

なんて。もう一ヶ月も経つのか……。
天気がいいな。

「ゆうとー、美味くなつたじゃん！」

ふと、過去から現実に戻ると、いきなり空耳が聞こえた。お菓子
の方から懐かしい声が
したと思つた。

少しひびくりしたが、なるべく期待せずに菓子に手をやつた。視界に入ってきたのは、赤とピンクの幅子。菓子はなくなっていた。

胸はいけないと思つても小踊りをします。

「……俺、頭おかしくなったか？」

自分の状況をぽつり。

幻まで見えるなんて。そいつの頭がいかれてるに違いない。

「ち、違うよ。むつとさん！　あかが生き返ったのー！」

「むつとのおかげだ。ありがとう。」

ももとあかが口々に言つた。嬉しそうな満面の笑み。思わずつられそうになつた。

だが、はつきりと思つたことをおひつ。

「何でだ？」

ちなみに両方に聞いている。

結局最後の願いは叶わなかつたはずだし、俺はあかを助けることができなかつたんだ。

それがなぜ今更になつて……幻覚以外に思えるわけがない。

あかともものは田を見開いて俺を見る。

「だつて、ももから聞いたよ？あんたが、ももに神様の記憶を消せ

つて願つたんだろ？」

「はつ？」

あかの台詞について聞き返してしまった。

ちょっと待てよ。それを言つたのは、ももが消えて、ひつそり一人で泣いた後。冷えた頭で考えた時。

ももを横目で見た。俺の視線を感じたのか、慌ててそっぽを向き口笛を吹く。

「……もも。お前、あの場にずっと居やがったな！？」

ガタソと机を拳で叩いた。あかとももが反動で小さく飛び上がった。

「この野郎っ。人が誰もいないと思つたから泣いてた時にっ！」

「や、やだな。ぬうとさんの泣き顔なんて見てないよー。」

「やつぱり居やがったな！？」

「どういひへ」

ももの言葉に熱くなる俺を、あかが両手を上げて落ち着かせようとする。

だが、どうどうなんて、俺は牛じゅねえ！

……怒つていても仕方ない。なんで、ももが願い事を叶えたか。つてことだ。

「はあ。まあいい。それよりもも、お前の時言つたよな？自分が消える前なら願い事を叶えるつて。それがどうして消えた後に言つたことを叶えたんだ？」

「それは、小人が人間への手伝いをするから」

ももはそういう言ひでウインク一つ。誤魔化してるのがバレバレだつ
つーの。

じと田でしばらく見てみる。ももは乾いた笑いをした。

「あは、やつぱり黙田？……実はね、あの姿が消えるまでつていう
のも神様との約束で。要するに、あかの名前を呼んだ記憶と一緒に
消しちゃえば大丈夫かな～なんて」

あははと尚も笑つももに、あかさえもじと田で凝視していた。

「無茶するなよ。もも」

「大丈夫。神様忘れた。何も危険なし」

あかの言葉に答えたのは別の声。よく見ると、あかの後ろに白い
小人がいた。

台詞からすると、この小人が記憶を消す魔法を持つてているのだろう。
う。

と、すれば。

「そうか。ありがとう、しる」

「をい、あか。お前が来たのは、自分が生き返ったのを知らせに。
つてわけじゃないな？」

記憶を消すのがいるつてことは、そつこつことだ。
最初の約束。三つ願いを叶えさせてくれ。そしたらあなたの記憶
を消すことができる。

あかは頷き、神妙な顔付きで俺に囁いた。

「ああ。わかつてゐとは思ひたゞく。やつと。あなたの三つの願いは全て叶えた。」

「わかつてゐ。今度は俺の記憶を消すんだろ?」

俺はあかに笑いかけた。

あかは、額に皺を寄せ、俺に視線を返す。

「本当にいいのか?」

そんなすねた顔で、すねたこと言つなよ。躊躇つちまつだひ。

「いいや。今なら後悔もない。全てが終わった今の、晴れ晴れとした気持ちのまま忘れられるなら、悪くねえ」

本当は、また一緒に遊びたい。

こんな良い思い出、忘れてくんんなさい。

けど、約束だ。

あかが頷いて、しひこ指示を出した。

俺は自然に目を開じる。

今度目を開けた時、俺は全て忘れているだろう。

それでいいんだ。

俺はうつすらと目を開けた。目の前にはいつも同じ風景、……。

「をい。 なんで俺はまだ覚えてるんだ？」

記憶はなくなってなんかいない。 あかやももとの出会いからはじまりと覚えている。

問い合わせに、あかがにんまりと笑つて答えた。

「そりやそりや。 違う魔法をかけたんだから。 言つただろ？ 願い事を叶えたら一回だけその人間に魔法を使うことができる。 って。 それは、記憶を消す魔法じゃなくてもいいのさ。 しきがゆうとにかく魔法は」

そこで止めると、あかとももは顔を見合せた。
笑顔がさりに明るくなり、俺に戻つてくる。

あかとももは、口を揃えてこう言つた。

「僕（私）達を決して忘れない魔法。」

決して忘れない。

忘れなければ、名前なんか呼ばないだろ？
あかの口調は笑つていた。

俺も、笑つた。

あか達が、俺と同じ気持ちだとわかつたら、

嬉しかつたから。

だから、ずっと一緒にいよう。

小人。彼等の名前は諸刃の剣。
知られてしまえば死ぬことにも成り得るが、それを乗り越えたな
ら……。

小人は幸せを、手に入れられるのだ。

完

赤い小人（8）（後書き）

中篇です。

この話はとりあえずメルヘンちっくだったな。なんて。

当初はあかと主人公以外出てこなかつた予定だつたんですが、いつの間にか増えてましたね（笑）

しかも、三つの願いというのも実は全然違う目的で使おうと思つて

たり。

まあ、最初とはだいぶちがくなりましたが、今回はこのストーリーが一番だと思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217f/>

赤い小人

2010年10月28日08時24分発行